ヤスクニ通信　No.264　2022 年 3 月 18 日
発行　靖国神社国営化反対福音主義キリスト者の集い（略称「つどい」）　代表・星出卓也（Tel/Fax042-458-0251）
事務局　西東京市柳沢 2-11-13 西武柳沢キリスト教会気付　HP　https://yasukuninotsudoi.christian.jp/
例会　毎月第3金曜　7:00～9:00pm（休日の時第 4 金）　会場　NCC フリースペース（新宿区西早稲田 2-3-18 日本キリスト教会館 24 号）

ヤスクニ・レポ　264

「剣をさやに納めなさい。剣を取る者は皆、剣で滅びる」

～ロシアによるウクライナ武力侵攻で「地の平和」崩壊の危機に！～

吉村　弘司（日本キリスト改革派大宮教会長老）

序　（「地の平和」崩壊の危機）

先月 2 月 24 日に、突如、ロシアがウクライナに侵攻(侵略)しました。戦争の惨禍にいる人々の嘆き、悲しみ、涙が止まりません。み子の降誕の時、主の天使の賛美「いと高きところには栄光、神にあれ、地には平和、御心に適う人にあれ。」(ルカによる福音書 2 章 14 節)にある「地には平和」が崩壊しました。日本キリスト改革派教会（大会「宣教と社会問題に関する委員会」委員長 弓矢健児）は、2022 年 3 月 4 日に、「ロシアによるウクライナ侵略に抗議し、平和的手段による解決を求める声明」で主イエス様のみ言葉「剣をさやに納めなさい。剣を取る者は皆、剣で滅びる」(マタイによる福音書 26 章 52 節)を引用しました。平和の祭典と言われる冬季「パラ・オリンピック」の前に戦争の現実を目にした国連総会（193 ヶ国）は、「ロシアによるウクライナ侵攻を受けて開催した緊急特別会合で、領土保全や武力行使禁止を定めた国連憲章違反と侵攻を糾弾し、軍隊の即時撤退を求める対ロシア非難決議案を 141 ヶ国の賛成多数で採択しました。(2022.3.2※ロシアの反対で強制力は無し)」

１．　東西冷戦の再来、核兵器の使用の危機！

ロシアのプーチン大統領によるウクライナ侵略は、戦前の日本の中国侵略によく似た構図です。1930 年代の日本は軍部の力が民主主義政治を崩壊させ、1931 年に満州事変で皇帝溥儀を傀儡政権として満州国を建設し、1937 年に盧溝橋事変後、中国への全面的な日中戦争以後、アジア諸国を侵略した太平洋戦争となり、ヒロシマ・ナガサキへの人類初の原子核爆弾で滅びるまで日本は軍部の暴走を止められませんでした。先の侵略戦争では、アジア諸国民 2000 万人を殺戮し、日本も 310 万人の戦争犠牲者〔民間人 60 万人他、兵士の戦死者 250 万人が靖国神社に英霊として合祀〕を出し、日本は連合国に無条件降伏しました。「剣を取る者は皆、剣で滅び」ました。

今回、ロシアは、2014 年にウクライナからクリミヤ半島を奪い(実効支配中)、現在、ウクライナ全土に戦争を展開中です。ウクライナにあるチェルノブイリ原発の爆発事故（1986 年）からソ連崩壊（1989 年）後、東西冷戦が終わり、国際協調主義が続くと思われた時、30 年前のソ連への逆戻りをめざすプーチン大統領の武力攻撃に世界中から抗議の声が出ています。しかし、ウクライナのゼレンスキー大統領（EU 加盟申請中）が NATO(北大西洋の軍事同盟)加入希望を阻止する口実で始めたロシアの武力侵攻を阻止できません。現在、戦死者の増大と共に、難民拡大(現在 200 万人以上)が今世紀最大規模（400 万人以上）と予測されています。EU 加盟国、G7(日本含)各国が、ウクライナ難民受入を表明し、国際決済網の SWIFT からロシア排除の表明（2/27）後もロシアの暴走が予想を超えています。廃炉処理中のチェルノブイリ原発を制圧し、他の原発も制圧予定です。プーチン大統領は「ロシアが有数な核保有国」と世界に向かって公言し、核兵器使用も辞さない覚悟で威嚇しています。今後、核爆弾、原発爆発事故(福島の原発爆発から 11 年目)が起これば、ヒロシマ・ナガサキの大惨事、チェルノブイリ原発事故以上の被害も予想されます。

２．ウクライナが、南北に分断されたドイツ・朝鮮・ベトナムの悲劇の歴史再来を危惧！

ロシアもウクライナも、旧ソ連の一員(兄弟・同じロシア正教会)であるにも関わらず、冷戦後の民主化の流れが、旧ソ連から分かれた国々に影響を与えＥＵや NATO 加盟を希望する国がロシアを囲む地域で増加に脅威を抱いたと言われています。今回、ロシアのプーチン大統領(69 才)の権限が拡大し、独裁者と思われるような発言と戦争遂行の動きに国際社会が平和的手段での解決の糸口を見いだすことは極めて困難な事態です。昨年は米国の 9・11 同時多発テロ事件から 20 年目でした。米軍のイラク戦争、アフガニスタン戦争の結果、世界中にテロが拡散し、世界の国内外の戦争による難民の悲劇（8000 万人以上）がウクライナでも日々おきてい

ます。

３．ロシアとウクライナの和解・平和の道を求めて!

戦争の現実の中、悪霊とサタンの猛威の前に、全能の主により頼み「主の十字架の愛・和解・平和の福音」の助けを祈り求めます。平和学の第一人者と言われる、ノルウェーのヨハン・ガルトゥング博士は、単に戦争のない状態を平和と考える「消極的平和」に対して、貧困・抑圧・差別などの構造的暴力がない状態を平和ととらえ、「積極的平和」と定義し唱えて世界の多くの紛争解決に貢献しました。「剣をさやに納めなさい。剣を取る者は皆、剣で滅びる」(マタイによる福音書 26 章 52 節）「主は国々の争いを裁き、多くの民を戒められる。彼らは剣を打ち直して鋤とし／槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず／もはや戦うことを学ばない。」（イザヤ書 2 章 4 節）

アラブの春の理論的な指導者のジーン・シャープは「非暴力抵抗運動」「独裁から民主主義へ」他で成果をあげた 198 例（ガンジーや、ML.キング牧師等の非暴力抵抗運動他）を抽出して、各地の民主化運動の理論的指導者となりました。「王は馬を増やしてはならない。馬を増やすために、民をエジプトへ送り返すことがあってはならない。」（申命記 17 章 16 節）「平和を実現する人々は、幸いである、／その人たちは神の子と呼ばれる。」（マタイによる 5 章 9 節）「しかし、わたしは言っておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。」(マタイによる福音書 5 章 44 節）(2022.3.8)

２０２２年２月１８日例会奨励
「座って考え、その先を見ている」ルカの福音書１４章２５−３３節

日本福音キリスト教会連合　西堀キリスト福音教会　牧師　須田　毅

「自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしの弟子になることはできません」(27)との、主イエスの重要な御言葉に続いて、二つのたとえがあります。これはルカ福音書にしか出てこないものです。ひとつは塔の建設のたとえであり、もうひとつは二万人の敵を迎え撃つ、一万人の兵しか持たない王のたとえです。この二つのたとえで鍵になるのは、「座って考える」ということです(28、31)。いろいろな計画や危機的な出来事と取り組む場合に、しっかり考えること、腰を据えて取り組むことを前提にするようにと教えられます。そわそわと腰が落ち着かないのは、だめなのです。

塔の建設のためには、その建設全体を見渡していなければなりません。資金計画や、建設者の人員調達や作業計画が必要です。土台だけしか築けなければ、それは塔としては認められません。途中、計画通りに必要なものが満たされなければ、それが整うように改めて追加準備をしなければならないこともあるでしょう。しかし、塔の完成を見通しているならば、途中にトラブルがあるとしても、それを乗り越えるために知恵や方策を尽くすのです。そのように、座ってじっくりと以後の対策を考え、腰を据えて目的を達するのです。

二万人の敵軍と戦う場に直面する、一万人の兵力しかない王も、しっかりと腰を据えて、この戦いを熟慮するならば、圧倒的な兵力の差に、負け戦であることが明瞭に見えてくるでしょう。王によっては、「兵力に圧倒的な差があっても、精神力で勝てるはずだ」とか、「負け戦だが、当たって砕けろだ」と考えるかもしれません。しかし、ここでは、負けがわかっているならば、講和を結ぶ方が良いのだとしています。王であるならば、無駄に兵のいのちが失われるようなことを避ける方が賢いのです。精神論などでは無理であり、私たちの人生においては「負け」を経験することもあります。負ける際には、恥をかいたり、誇りが傷つけられます。しかし、これも腰を据えて見通すならば、王としては民を守り、困難を経験しても先を進んでいく方が良いのです。知恵ある生き方は、ときに負けることを知り、それを受け止めて次の歩みにつなげていきます。

私たちの信教の自由に関わる取り組みは、時に中途で挫折したり、負けが続くような歴史も多く積み重ねているように思います。諸先輩方との話の中で、「日本のキリスト教会の社会的課題との取り組みが、教会内で最も力を持って意識されたのは、1968 年の靖国神社国家護持法案が提案された頃であり、その次が平成の大嘗祭施行の 1999 年前後ではないか」と述べられました。危機的状況に反応した世代がうらやましいようにも思いますが、日本の社会的状況は悪くなっていると実感しています。今や、心境としては負けが立て込んでいるかのようですが、しかし、主イエスの弟子としては、今こそ腰を据えて、しっかりと信教の自由を信仰者として訴える道筋を、見失わないようにすることが必要です。次の世代に課題を伝え、キリスト教会らしい取り組みの継承を未来に見据えて、私たちの活動を継続してまいりたいのです。